



幕末の安政期、利尻島に新しい漁場を求めて出稼ぎ漁民が進出し、明治2年には場所請負制が廃止されたことにより、青森や秋田、新潟、遠くは鳥取などの日本海沿岸地域からの漁民がたくさん入ってきました。とくに、島内全域に漁場を持った松村幸右衛門(又一)などは代表的な漁業家です。明治末から昭和初めまで、島はニシン景気に沸き、北見神社にある明治期の句碑「押かける 鯨の山や 神の幸」が示すとおり、最盛期で年間10万トンの水揚げすることもありました。ニシンはカズノコや身欠き、ニシン粕(畑の肥料)など余すところなく加工され、おもに関西・北陸方面へ

運ばれました。



モッコで運ばれるニシン

漁の安定から移住者が増え、大正

時代には17,000人ほどの人が住み、市街地には旅館や料理屋、劇場、呉服屋などが立ち並ぶほどにぎわいをみせていました。さらに毎年春になると、縁のある島の親方を頼って青森を中心に若い衆が大挙して働きにやってきたといわれます。



しかし、昭和28年頃を境にニシンも獲れなくなり、建物の建て替えや道路・護岸整備などにより当時の面影を思わせるような番屋、袋澗(ふくろま)、釜場などは、今では少なくなりました。

また、ニシン漁には“風”が深く関わっており、その吹く方向により独自の呼び名がありヤマセ(東風)やヒカタ(南西風)など今でもなじみのあるものもあります。

← 鰐泊の袋澗

↓ 船で埋め尽くされた鬼脇港

